図11　遺跡の位置
５万分１地形図「新津」

図12　原遺跡

原遺跡　秋葉区程島・中村

原遺跡は、新津丘陵西面の台地状の緩やかな尾根に立地する、縄文時代の集落跡と推定される遺跡である。周辺の標高は一五メートルほどで、推定範囲は南北三〇〇メートル、東西一二〇メートルと広い。古くから知られていた遺跡で、明治二十九（一八九六）年には石器時代の遺跡として『東京人類学雑誌』に報告されている。発掘調査はされていないが、多くの研究者によって踏査され、遺物が採集されてきた。

採集された縄文土器は、竹を割ったような工具で付けた文様が特徴的な中期前葉のものと、細い棒のような道具で点々と突き刺したような文様や、平行した複数の線で構成された文様などに代表される後期前葉の二時期に大きく分かれている。発掘調査されていないため、ほかの時期もあるかもしれないが、新津丘陵東面の平遺跡と同時に存在した時期があったのは間違いなかろう。

石器では石鏃が五〇点ほどと多く、長さ一一センチメートルの大形の尖頭器状石器や、一辺八センチメートルの三脚状石器など、市

域では発見例の少ないものも採集されている。図一五の石棒は長さ二七センチメートルのほぼ完全な形のものである。端部は沈線で四段に区画され、花弁のような三角文様が二段施されており、縄文時代後期の石棒と推定されている。また、顔の幅が七センチメートルの土偶（どぐう）頭部片（図一六）がある。時期は不明であるが、平遺跡のハート形の顔と比べ、写実的である。大きな集落であったため、このような希少な遺物が採集されたのであろうか。

図13　採集土器

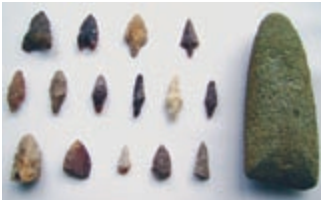
図14　採集石器

図15　石棒

図16　土偶の頭部片

原遺跡と平遺跡（八ページ）とは直線で約三・三キロメートル離れている。顔を合わすことも多かったであろう。大きな原遺跡と小さな平遺跡に暮らした人々は、どのようなムラ付き合いをしていたのであろうか。